



蛸親爺

第7話 萬屋金亀堂

雅^{がうん}雲すくね

「たーこ、たーこ。たーこ、たーこっと、今日は照り返しがかなわねえ。暑気あたりに効くビール」

土手の上にほのめき立つ陽炎を透かした向こうから、蛸が来る。犬を伴っている。

「わん」と秋田犬が応じる。

「おめえさんも暑くはねえかい」と土手際の店の前に出た縁台に腰を下ろした。

『萬^{よみず}何でもあり 萬屋金亀堂』と札の下がった店先には蛸の腰をかけた縁台、大小の鉢植えが群がり置かれ、藍の水瓶では金魚が一跳ねした。開け放ったガラス戸の内は、ビールやサイダー瓶の並ぶ冷蔵庫、壁際の棚にはちり紙、洗濯石鹼などが積まれ、正面の台の上には、乾物や駄菓子などが置いてある。『甘酒 稲荷鮓 飴湯アリ』と張り出された下には、柱に打った釘から鯉節が下がる。奥にはテーブルが並んで扇風機が伸ばした頸を振っている。

奥から五十恰好の男が顔を出した。白い前掛けをつけている。

「ああ、蛸の旦那。いらっしゃい」

「おう、今日も天気がいいな」とガラス戸の蔭から頭を出した。

「そこじゃ日差しがあるでしょ。店のなかへ坐っちゃあ」

「そうだな」

蛸は簡単な造りのテーブルに坐り、麦藁帽子を脇の椅子に載せた。犬もついてきて土間に蹲る。

萬屋が冷蔵庫のガラス戸を開けておしぼりを出した。

「やっぱりこういう日には、白玉に赤砂糖をかけた物でも食いたいが、ま

あ、ビール。義理じゃないよ。おめえは何飲む」と犬に聞く。

「わん」

「コーヒー牛乳かい。犬がそんなものを飲むとは知らなかった。あと、こいつにはコーヒー牛乳な」と蛸は犬を指して、萬屋へ注文した。

「あいよ」

萬屋は冷蔵庫からビールと牛乳の瓶を出して、テーブルへ置いた。

蛸はおしぼりを払げて、頭をつるつるに拭く。

「へへっ、おしめり、おしめりっ」と

ビールを一息にあおって、「ああ、はらはたへしみとほる」と舌も体も蒟蒻の様にした。

「蒸した日にゃ、これだね。今日は爺さんはどうしたい。店先で今川焼きは商わねえのかい」

「八月は休みだよ。今日は敬老会の旅行だよ」

「北海道にでも行ったかい」

「いや、行徳行って潮干狩りだ」

「暑いんじゃないのかい」

犬は黙って床の牛乳瓶の前に控えている。

「ああ、壘のままじゃいけねえわな。何か、皿あるかい」

「これでいいかね」と萬屋は手塩皿を出した。

「おう」

萬屋から皿を受け取った蛸は、コーヒー牛乳を注いで床に置いた。

「やってくんな」

「わん」

「礼には及ばねえよ」

往来からは、「ええやあひん。ええやあひん」と魚屋の声がする。

コーヒー牛乳を飲む犬を見ていた萬屋が、

「この犬は飼ってんのかい」

「いや、飼ってるちゅうか。あれは十日ばかり前のことよ。夕涼みに暗渠をぶらついていたたら、この犬がやって来てな。ついて来るんだよ。何かをねだる風でもなく、じっと前を見てな。おれが暗渠から出て、下宿の横丁

に入ったら、犬はそこで戻って行ってよ。あくる日も同じ様に脇について来んのよ。飼ってやろうと思って挨拶したら、『飼ってもらう分には及ばぬ。俺の尻尾の毛を三本やるから、お伴をさせてくれ』と答えるのよ。それ以上は掘って聞かなかった。それから仲良くなったのよ」

「利口そうな犬ですな」

「おう。頭の回転が早いんだよ。気のきいた返事が出来るしな」

「今日もついて来たんですかい」

「いや、縁側で猫に鉛節をやっていたら塀越しに誘ってきた。向こうで一声吠えたから、おお、よく来た。表へ廻ってくれと出迎えてさ。軽く一杯やりに来たのよ」

「わん」

「何。『この礼はいつか必ず』っていいよ。人間みてえなこと言いなさんな。犬なんだから」

「まめやかな犬だねえ」

「どうもな、犬ころつつうのは、人間に従ってくるね」と蛸はコップを置いて、犬に眼をやる。空いた皿に残りのコーヒー牛乳を注ぐ。

「そうせすにはいられないんでしような」

「狼は一匹でやってんのに、どうしてまあ、こうなっちまったのかな」

「人懐こい狼を集めていたら犬になったんでしょ」

「わん」

「天と地の間に立つからには、世界の役に立たねばって」

「武士みたいなことを言う犬だねえ」

「そうだな。先々の欲得を思いめぐらす様な面には見えねえ」

「わん」

「今のは何て言ったんですかい」

「コーヒー牛乳がうまかった、とよ」

「ははっ。ありがとうな」

「ビール瓶は空になる。」

「ビールはどうするね」

「やめとくわ」

「今日はおっさりしてるね」

「近頃、居続けて飲む気も、あまりな。これから、河原を廻って帰るわ」
「毎度どうも」と萬屋が蛸を送る。

「たーこたーこ、たーこ、たーこ」

道端で草の間をつついていた雀が、蛸の身近を飛び去った。

蛸は土手の上を行く。犬も付き従う。

夕日が映じ、表に出された水瓶には金柑色の波紋が生じていた。

隣の唐辛子を売る家では、玄関に上がる三段の石段を下りたところに猫が眠る。立てた瓦で築いた花壇からは、榿むくげが軒まで伸びて花をつけている。枝に隠れて立つ柱に赤い紐を結んで、先は斑猫ふちの首輪まで届く。猫は紐の張り切るほど往来まで下りて寝ている。眉間に一つの波を寄せた。

〈つづく〉